



中高生とともに差別と闘う

「信じる」でなく「信じ抜く」

吉成タダシ（うずしおブランチャ代表）



踏み出す勇気

娘を中学生集会に連れて来るなかで、自分のルーツが部落であることを伝えたシンジ。娘の個人懇談でも自分を語り、学校を巻き込みながら、娘のサポートを可能にする体制を模索するシンジは、校長先生にもアプローチします。

そのあと学校に電話して、「校長先生いますか」って。もうすぐしたら帰って来るっていうので、行きました。

校長室に行って、勇気振り絞って、「実は部落出身でね」って。そして校長先生がこう言いました。「部落問題、同和問題、これが授業から遠ざかっているのが悔しくて仕方がない。どうしてこれをもっとベースにして話し合いができないか。校長をしながら悔しくて仕方がない」そう言ってくれました。それでね、すごく話しやすい空気になってね。ボクと校長先生がね、涙涙の会になって。

すごい安心したというか、そういう思いの中でやってくれる、関わってくれるっていうのが嬉しくって。それで、「絶対に娘さんを守ります」と。「何が何でも守ります」と。安心しました、ボク。娘の周りにはすごい思いのある先生がいるなって思ってた。でもそれは聞かないと分からないこと——

一歩を踏み出す勇気。思えばそ

のことを、中学時代に徹底してやってきたように思います。

「みなさんはどう思いますか。どう受けとめましたか」

本音を語った友に、言葉を返すことを強いました。これは簡単な一言なのですが、実はあまりされません。されている場面を見たことがありません。でも本当は、すごく大切であり、必要な一言のようになっています

待つ勇気

教師が言葉を返すことはよくあります。でも、それではダメなのです。教師が言葉を返すことがダメというのではありません。でも、それだけではダメだということなのです。なぜならいじめも差別も、子どもたちの生活の中で起きるからです。そこに教師はいません。ですから、子どもたち同士が直接的につながりが必要なのです。

言葉がすぐに返る場面ばかりではありません。返す言葉を見つけれない子どももいます。躊躇して手を挙げられない子どももいます。沈黙の時間が流れることも度々ありました。それはそれは息苦しく、場が凍りついたようになり、息を潜めて周囲を伺うような状態に陥ります。

教師が言葉を発すればいいのでしよう。私自身、耐えられなくなったり、怒ったように叱りつけたり、説教のようにしゃべったりしたこ

ともありました。でも、怒るのも、説教をするのも、すべて自分の弱さであり、不甲斐なさの現れでしかありませんでした。

「待つ」

とにかく、待つのです。信じて待つ。しかしそれは、徹底的に子どもとかかわり、心と心のやりとりを繰り返してきただけという、信頼性に裏打ちされたものでもあります。だから待つことができるのです。

とはいえ、この「待つ」ことは、難しいことでもあります。

「信じる」でなく「信じ抜く」

みなさん、子育てでも似たようなものだと思いますか？ 思うようにいかず、腹も立ち、イライラもし、どうしても分かってくれないの……と呪いたくなるような思いをすることがあるのが子育てではなかったでしょうか。そのとき決まって、自分の不甲斐なさばかりが浮き彫りになり、まるで自分が試されているかのような気分になる。教育もまったく同じなのだと思います。

信じて待つ。「待つ」ためには、「信じる」ことが必要になります。けど、単に「信じる」だけなら、そんなに難しいことではありません。そうではなくて、ここでの「信じる」は、「信じ抜く」という意味が含まれています。それはある種の覚悟が必要だということです。「信じる」とは、子どもを信じるのですが、それは目の前の子どもを信じるだけではありません。子

ども自体が持つ「可能性」を信じるのです。そして、その「信じる」を貫く、自分自身を信じるのです。子どもが信じられずに心が揺らぐのは、実は子どもを信じられないのではなく、自分を信じられてないから揺らぐわけです。本当に信じて聞いかけ、語りかけて待つてさえいけば、不思議と子どもたちは応えてくれるものです。

前述で「強いる」と言いましたが、それは適切な表現ではないかもしれません。的確に言えば、「真剣に自分と向き合う場をつくる」が正確かもしれません。そこには教師も生徒も、大人も子どもも、それぞれの立場は関係なくなってしまう。同じ一人の人間として、みんなが真剣に自分と向き合い、悩み、考え、自分なりの答えを導き出そうとします。そのとき子どもたちは、「一緒に頑張って真剣に考えてくれる大人がいる」と感じます。この、「上から」でないフラットな関係性が、子どもたちに安心感を生んでいくように思います。

いずれにしても、信じて「待つ勇気」が、「踏み出す勇気」を生み出したことは確かです。そんな極限状態を繰り返し何度も体験していくと、そこには「共に闘った仲間」のような絆が生まれたように感じますし、かけがえのない仲間となっていくように思います。シンジも、タクヤも、そんな子どもたちと私との関係性のなかにある一人だということです。